



水のゾミア試論
—— 東南アジアの海民を事例として ——

鈴木 佑 記 *

**An Essay on Watery Zomia:
With Reference to “Sea Gypsies” in Southeast Asia**

SUZUKI Yuki*

ジェームズ・C・スコット, 『ゾミア——脱国家の世界史』(佐藤仁監訳, みすず書房, 2013 年, 464p.)
(原著 James C. Scott. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. New Haven: Yale University Press, 2009, 464p.)

I は じ め に

訳書名ともなっている「ゾミア」とは、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムという東南アジア大陸部の国々と中国南部、それにインドとバングラデシュの東端を合わせた広大な山岳地帯を指している。この地域は長い間、国家による統治の力が及ばない空間であった。

だが本書は、ゾミアのみを扱ったものではない。言及される地域は、隣接する東南アジア島嶼部だけでなく、遠く離れた北米、南米、中東、ヨーロッパ、アフリカにまで及ぶ。その意図は、国家の影響が容易には届かない各地の「避難地帯」¹⁾

を紹介することで、ゾミアで見られる諸特徴が、必ずしも一地域に固有なものではないと提示することにある。また年代も、紀元前の古代ローマの時代までさかのぼり、国家のあり方——例えば、労働力の収奪形態 (pp. 72-73) や権力者の資質としての読み書き (p. 227) —— が示されるなど、非常にスケールの大きい著作となっている。

このように、本書で取り上げられる地理的および時間的範囲があまりにも広いため、批評されることもある。たとえば、ヨーロッパ地域をゾミアと並置させて歴史化 (historicization) することの妥当性への問い [Jonsson 2010] や、詳しい説明もなく北米のマルーンの人々を取り上げてゾミアに関連付けて論じる問題 [Daniels 2010] などの批判が挙げられる。しかし、本書は著者にとって都合の良い文章を切り貼りしただけの壮大な物語ではない。著者のスコットは本書で、為政者とは真逆の立ち位置にいる人々の歴史を描こうとしているため、そもそも利用できる文献資料が少ないという研究上の制約がある。監訳者の佐藤仁が本書の「あとがき」で指摘するように、「スコットの想像

* 東洋大学アジア文化研究所; Asian Cultures Research Institute, Toyo University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8606, Japan
e-mail: moken.yuki@gmail.com
DOI: 10.20495/tak.54.1_117

1) スコットは、「避難地帯 (zones of refuge)」と同様の意味で「破片地帯 (shatter zones)」や「逃避地帯 (flight zones)」という言葉も使用している。

は都合の悪いデータの切れ目を取り繕う独りよがりな空想ではない」(pp. 351-352)。綿密なフィールドワークに基づいたたくましい想像力と、卓越した編集能力が、彼の議論を説得的なものにしている。スコットが冒頭で、「私は『間違っている』という非難を受けることは多いが、『議論が不明瞭である』もしくは『何を言いたいかかわからない』という指摘を受けることは稀である」(p. xi) と述べる通り、本書で展開される議論は極めて明瞭である。

本書で扱われる時空間の広がりには、批判の対象になると同時に、ゾミア以外の地域やあらゆる時代についても、スコットが展開する議論が有効であるか否かについて、我々に考える契機を与えてくれる。高山地帯と同様に統治困難なマングローブの茂る沿岸域で調査を続けてきた筆者も、本書に知的な刺激を受けた読者の一人である。ここで言及する沿岸域とは、スコットが述べるところの「水のゾミア」(p. xv) に他ならない。

本稿ではまず、本書の概要を提示する。その上で、スコットが本書でほとんど取り上げることのできなかった水のゾミアを論じることを試みる。そして、「現代のゾミア」論に向けた方向性についても最後に考えてみたい。

II 『ゾミア——脱国家の世界史』の概要

第 I 章「山地、盆地、国家——ゾミア序論」では、ゾミアの地理的範囲と特徴について取り上げられている。つまり、ゾミアとは 8 つの国民国家に跨る海拔 200 メートルから 4,000 メートル以上の山地であり、国家勢力の圏外に位置する「避難地帯」とされる。そこに暮らすのは、平地(低地)²⁾から自らの意志で移動して山地民となった人々であり、総人口は 8,000 万人から 1 億人にもなる。彼らに共通しているのは農業様式が多様であり、分散と移動を繰り返し、平等主義的な社会を持つ

点にある。著者はそのように述べた上で、ゾミアを平野国家との関係において考察することを本書のテーマに設定している。

第 II 章「国家空間——統治と収奪の領域」では、国民国家が成立する以前の「伝統的な国家」が統治を及ぼすことのできる範囲について説明している。著者はまず、初期の国家形成において、その中心部から地理的に近い範囲に人口を集中させ、また労働力を確保する上で水稲耕作が果たした重要な役割を指摘する。そして、国家は水稲耕作地を中核地域とし、河航水路に近い、高い平地に造営されていた点を、東南アジア大陸部の古典国家を例に挙げ示している。それら国家の影響力が到達する範囲は平坦地で強く、標高の高い山地では弱かった。さらに、そうした地勢の要素に雨季や乾季といった季節性が加味され、国家の統治権は山地に及びにくかったという。

第 III 章「労働力と穀物の集積——農奴と灌漑稲作」では、国家における穀物と人口の集約について、水稲と奴隷に着目して論じられている。灌漑稲作を基本とする前植民地期の水稲国家では、耕作者に主食穀物の単一栽培を国家の中心域で行わせていた。水稲に従事する労働者は定住化し、国家にとって監視と徴税が容易な存在となる。ところが、この労働者の恒常的な確保が、国家にとって大きな課題であった。平和的に拡張している時期の水稲国家は、仕事や貿易の好機を求める移民たちを惹き寄せるが、そうでない時期は戦争捕虜や奴隷狩りにあつた山地民を平地に強制移住させることで労働力を確保するしかなかった。そのようにして国家の中心域に集約された多民族の労働者は同化し、新たな国家の基盤となるアイデンティティを創出していった。

第 IV 章「文明とならず者」では、「野蛮人」というカテゴリーが国家の産物であることを明らかにしている。国家の視点からは、水稲国家で生活することが「文明」であり、その外で生活することは「野蛮」であるとみなされる。ゾミアの場合、標高の高い、統治が困難な山間に暮らす山地民が「野蛮人」となる。このように、低地国家に住む平地民は高地に暮らす山地民を見下していた。その一方で、平地民は山間部でのみ得られる物品を欲

2) 本書では、平地と同様の意味で低地という言葉が多用されている。基本的には、山地に対して平地、高地に対して低地という言葉が用いられている。

し、また山地民も平地でのみ入手可能な物品を必要とするので、両者は経済的な依存関係にあった。文明と野蛮は鏡像関係にあり、野蛮から文明へ単線的に移行するのではなく、文明から野蛮へと自ら進んで立ち位置を変える人々が多く存在した。

第V章「国家との距離をとる——山地に移り住む」では、人々が山地に逃避する背景について説明がなされている。水稻国家で暮らすことは課税や賦役が伴うことを意味する。国家の臣民は、凶作が起これば徴税に苦しみ、戦争が起これると略奪や捕虜にされることを恐れる。また、人口が狭い範囲に集中する国家空間では、人や穀物に付する害虫が過密状態にあり、疫病にかかる危険にさらされる。人々はこれら飢饉、戦争、疫病などを避けるため、水田のある中心地から国家権力の周縁にある山地へ移動する。そうした人々には農民だけでなく、脱走兵、敗残兵、逃亡奴隷、異端の僧侶などが含まれる。山地は国家に抗する広大な辺境として存在するわけである。

第VI章「国家をかわし、国家を阻む——逃避の文化と農業」では、山地社会の農耕のあり方と社会構造について取り上げられている。国家の支配をかわすために重要なのは、その権力が及ばない場所にいること、そして居場所を次々と変える移動性にある。移動性の高さは支配層による課税や奴隷化の脅威を遠ざけるだけでなく、動物性感染症から身を守ることもつながる。生業面では狩猟採集が最も移動性が高く、焼畑農耕が次に続く。いずれも灌漑水稻農業や定住型農業に比べると移動性が高い。移動耕作に従事する人々は、定住農耕を行う人々に比べると高い自律性を確保でき、労働と収穫物を自由に配置できる利点がある。栽培品種のなかでも特に収奪を避けやすいのが、成熟した実を地中に保管できる根菜類と塊茎類である。社会構造に目を向けると、収奪に最も抵抗があるのは平等主義的で小規模な「部族的集団」である。彼らは複数の文化的、言語的な組み合わせから潜在的なアイデンティティを状況に応じて選ぶことで、永続的な上下関係に組み込まれるのを回避してきた。

第VI+1/2章「口承、筆記、文書」では、文書を残す筆記の文化と口承の文化の特徴が対比的に

明らかにされている。国家にとって文書と筆記の欠如は、統治不能を示す。なぜなら、課税対象地の地籍図、賦役労働者の登録名簿、法令、勅令、契約書などの書類を残せないためである。また一部の権力者が自らの正当性を示すための唯一無二の系譜や歴史を提示できないことを意味する。それに対して、山地社会で移動・分散して暮らす人々にとっては、口承こそが戦略的に自らの立ち位置を柔軟にずらすことのできる重要な技術である。口承の文化では、利害関係の変化に対応して、便宜主義的に歴史、系譜、習慣に関する語り口を変えることができるからである。

第VII章「民族創造——ラディカルな構築主義的見解」では、部族や民族が国家との関係性のなかで創造されるものであることが説かれる。部族の対義語は小作農である。小作農は国家に統合されている臣民であるのに対し、部族は国家に編入されていない人々である。国家は小作農となっていない集団を分類し、管理するために名付けの作業を行う。このように、国家の政治的な意図に基づいて部族は恣意的に創りだされる。山地社会に生まれた多くの部族は、自ら利用できる資源を確保するために部族的アイデンティティを採用することがあれば、境界を他集団との間に引いて新たな民族的アイデンティティを主張することもある。つまり、山地民にとってのアイデンティティとは、対峙する相手が誰かによって、状況に応じて変化しうる流動的なものなのである。そうした社会では絶対的に正しい家系は存在しない。家系は書き直される場合もあれば、持つこと自体を拒否される場合もある。山地民は家系を操作することで、階層間格差が生じるのを防ぎ、平等主義的な社会を構築してきた。

第VIII章「再生の預言者たち」では、国家に編入されないための技法として、山地の聖者に導かれた反乱が取り上げられている。山地社会は平地社会の僧侶や隠遁者などの「賤民知識人」と緊密な接触を持っており、平地の宇宙論的思想が山地へ伝播してきた。山地のカリスマ的預言者は、共同体を襲う国家からの脅威と危機を避けるために、平地の宇宙論を取り込むことで反乱を企てようとする。そのような預言者は多数存在し、その多く

は平地社会に通ずる多言語話者であり、家系や血統のしがらみから解放されている人々である。著者は千年王国運動の事例を中心に挙げることで、山地社会が国家をかわし破壊することを目的に、平地社会の思想構造を取り込んでいる点を指摘している。

第 IX 章「結論」では、VIII 章までに論じられた山地社会の諸特徴が整理されると同時に、グローバル・ヒストリーの研究として本書が位置付けられている。山地社会は、国家との距離を巧みに調整し、状況に合わせて柔軟に生きることのできる離反者で構成されていた。彼らは国家の中心部から離れた場所に位置取り、小規模な集団で散在しており、狩猟採集や焼畑耕作を生業としてきた。その目的は、国家の支配下に陥るのを回避することであった。このように、国家による統治を避けようとしてきた人々は、山地民だけではない。著者は、ゾミア地域の山地民だけでなく、水域に暮らす海のジプシー³⁾や農耕に適さない土地で生活する遊牧民などについても、グローバル・ヒストリーの観点から研究に取り組む重要性を説いている。

III 水のゾミア

スコットが論じたのは主にアジアの山間部であるが、アジアの沿岸部でも同様に、拡散し移動し続けることで国家を回避してきた集団がいた。その典型が、スコットが海のジプシーとして言及している、東南アジアの海域に暮らす漂海民として知られる人々である。彼は冒頭において次のように述べている。

海に生き、列島を渡る東南アジア島嶼部のオラン・ラウト（海の遊牧民、海のジプシー）が避難民の海域版であることは明らかだ。多くの山地民がそうであるように、彼らもまた戦闘に長け、海賊行為、奴隷狩りを営むこともあれば、海域警備隊もしくは攻撃員として

マレー王国に仕えることもあり、自ら立場を軽快に変えてきた。重要な海路の端に位置取り、突如出現しては攻撃を仕掛け、そして足早に消え去っていくこの人々は、「水のゾミア」を想起させ、本書の議論の対象としてまさにふさわしい。(p. xv)

しかしながらスコットも認めるように、本書のなかで水のゾミアというテーマが十分に論じられたわけではない。またスコットは、海のジプシーの好戦的な側面を強調しているが、全員が海賊行為や奴隷狩りをしていただけではない。たしかに歴史的にみると、スルー海域周辺における、労働力確保を目的とした海のジプシーによる海賊行為や奴隷狩りがあったことはよく知られている [Warren 1981; 早瀬 2003]。他方で、奴隷狩りにあつたり、海賊の襲撃から逃れるために移動したりする海のジプシーも存在していた [長津 1997]。

本書が出版されてから 7 年が経ち、すでに「陸のゾミア」に対する書評は多くでている [e.g. Daniels 2010; Slater 2010; Ferguson 2011; Thompson 2011; 佐藤 2014]。しかし、別の視点から本書を論じる試みがあっても良いように思われる。その試みの一つとして以下では、「水のゾミア」に目を向けて、なかでも、東南アジア海域世界に生きる海民を取り上げたい。そうとはいえ、スコットが陸のゾミアで論じた山地民の諸特徴——移動性の高さや地理的周縁性、小規模集団と拡散性、狩猟採集と焼畑農耕、農業様式と作物の多様性、平等主義、口承文化の発達、宗教的異端、民族的アイデンティティの流動性など——すべてを水のゾミアで検討することは、現在の筆者の能力をはるかに超えてしまう。以下では、陸のゾミアにおいて中核的テーマであったと考えられる「移動性の高さや地理的周縁性」、そして「民族的アイデンティティの流動性」という二つに焦点を絞り、水のゾミアを論じることにする。

IV 東南アジア海域世界の海民

東南アジアを海域世界という世界単位でとらえようとしたのは、立本成文 [1999] である。国家

3) 原著では「sea gypsies」と書かれているが、訳書では「海の民」となっている。

といった人為的な単位ではなく、社会文化的に、また生態的にも他と分けうるような一つのまとまりをなす空間が世界単位である。東南アジアを海域世界としてみた場合、東南アジアの島嶼部だけでなく、大陸部の沿岸域をもその範疇に含めることになる。また、単に海だけを指すのではなく、海とつながる河川やマングローブ林といった陸地をも含んだ空間として、海域世界は理解されなければならない。東南アジア海域世界の大部分は熱帯多雨林の森が覆う多島海であり、沿岸や汀線といった陸と水の「きわ」が、人間の生活基盤を置く場所として長らく選択されてきた [長津 2009a: 250]。そのような空間において、海と密接にかかわって暮らしてきた人々を、ここでは海民と呼ぶことにする。だが、東南アジア海域世界に暮らす海民すべてを扱うことは筆者の手に余る。本稿では、スコットが海のジブシーと言及した人々、すなわち日本でしばしば漂海民として紹介されてきた人々に注目する。

漂海民は、シージブシー (sea gypsies) の訳語として 1940 年代に考案された用語である。⁴⁾ 土地を持たずに船を住まいとし、漁撈しながら移動し続ける特殊な漁民を指すのに用いられるようになった [鈴木 2012; 羽原 1963]。1965 年に「海の遊動民 (sea nomads)」を主題に冠した書籍が出版されると [Sopher 1965]、東南アジアの多島海に暮らすサマ (Sama, あるいはバジャウ (Bajau) とも呼ばれる)、オラン・ラウト (Orang Laut)、モーケン (Moken) の 3 集団の海民が、研究対象として関心を集めるようになった。

サマ人の人口は約 110 万人である。居住地は、フィリピン南部からマレーシア・サバ州、インドネシア東部に至る、3 カ国を跨いだ広い海域に及ぶ [長津 2008]。オラン・ラウトの人口は 3,000 人から 5,000 人の間といわれている。居住地はインドネシアのリアウ・リング諸島を中心に、スマ

トラ島東岸やマレーシアのジョホール、かつてはシンガポールにまで広がっていた [Chou 2010]。モーケン人の人口は約 5,300 人である。⁵⁾ 居住地はタイとミャンマー (ビルマ) のアンダマン海域の沿岸と島々である [Narumon *et al.* 2007; 鈴木 2016]。いずれの集団も、陸のゾミアに暮らす少数民族がそうであるように、国境を跨いだ生活圏の広がりを持っている。彼らは船に乗って島々を移動しながら、広大な海域に拡散居住してきた人々である。⁶⁾ 以下では、先行研究の蓄積があるサマ人、そして筆者の研究対象であるモーケン人の 2 集団を取り上げる。

V 移動性の高さや地理的周縁性

スコットは、ゾミアに暮らす人々の重要な特性の一つとして、移動性の高さをあげた。頻繁な移動は、役人や商人などの支配層の力から逃れるために欠かせない。ただし、やみくもに動き続けていけば良いかというそうではない。場所が肝要である。陸のゾミアの場合、地形が険しく、起伏の激しい高地がそれに該当する。山地民は、低地に住む支配層の脅威が届きにくい高所を移動してきた。水のゾミアに暮らす海民の場合は、無数の島々を駆けめぐる複雑な水路のなかを移動することで、支配層の脅威から逃れてきた。山地民も海民も、国家の中心部から遠く離れた、周縁に位置する空間で移動を繰り返してきたわけである。

次の引用文は、水のゾミアの典型的な地理的空間を示している。

島の間を航行するのは、やさしいことではない。強い潮の流れがあって、水路の多くは満潮時だけしか通れない。広い砂州が海中に突

4) sea gypsies という用語の初出は、1851 年のトムソン (J. T. Thomson) による記述だと考えられている [Thomson 1851: 140]。彼はジョホール近くで見かけたオラン・ラウト (Orang Laut, 海の民の意) をそのように表現した。

5) 内訳は、島モーケンが 2,800 人、陸モーケン (Moklen) が 2,500 人である。

6) すべての海民 (漂海民) が船上生活者であったわけではない。浜辺の浅瀬に杭上家屋を建てて、定住的な生活を送ってきた海民も存在する。比較的海洋志向性の高い人々を「海サマ」や「島モーケン」、低い人々を「陸サマ」や「陸モーケン」と分けて考えることもできる [長津 1997; 鈴木 2014]。

き出ているかと思えば、あちらでは暗礁かマングローブの湿地があって、水路をふさいでいる。……われわれの船は、そんなに大きくないが、それでも水路の多くは、われわれには通れず、入江の多くは近づくことすらできない。[ベルナツィーク 1968: 13]

オーストリア人の民族学者（人類学者）による記録である。彼は 1936 年から 37 年にかけてタイとビルマの広域を移動し、各地の少数民族の村を踏査していた。上記の記録は、アンダマン海域でモーケン人を探すも、潮流と地形が障壁となり、思うように動けなかった時の状況をあらわしている。この記録を読むと、モーケン人にとっても島のあいだを航行するのは困難であったように思えるのだが、そうではない。「外国人」の船だと座礁するような、浅瀬を渡れるほどの、小回りが利く小さな船に乗っていたのである。

このような海域の辺境は当時、「陸のゾミア」と同様に、交易品になる商品が眠る豊かな産地であり、労働力（奴隷）の供給源でもあった。モーケン人はナマコを中心に、夜光貝、鼈甲（タイマイの甲羅）、ツバメの巣、高瀬貝、フカの鰭、蜜蝋、香木などを採捕する一方で、奴隷狩りの脅威に怯えながら暮らしていた。それは、次の三つの記録からもうかがえる。なお、丸括弧内の文章は筆者による。

（モーケン人は）マレー人の海賊に捕まらないように、絶えず移動している。……彼ら（モーケン人）は、自分達を捕まえて奴隷にしようとするマレー人、ビルマ人、シャム（タイ）人を避けるために、ツバメの巣やナマコがよく採れる島々から離れざるをえない。[Hamilton 1828: 226]

（モーケン人は）知識も文明化の程度もカレン人よりはるかに低く、華人やマレー人、それに周辺のすべての民族から見下され、ぞんざいに扱われ、（物資を）収奪されている。[Mason 1860: 100]

北からはビルマ人の山地民、南からは海賊のマレー人という、どちらも野蛮で無法者の脅威が押し寄せてきた。彼らがやって来るときはいつでも物を奪い、殺し、われわれ（モーケン人）を村落から追い出してしまふ。……（マレー人の海賊は）強盗、殺人を行い、何人かの仲間を奴隷にしていった。[Ainsworth [1930] 2000: 21-22]

上記の記録からは、当時のアンダマン海域において、モーケン人は他民族から白眼視され、危険な目にあってきたことがうかがえる。特に、マレー人の海賊はモーケン人にとって脅威の存在であった。一つの場所にとどまり続けることで、強奪や殺人、それに奴隷狩りの対象となるリスクが高まってしまう。モーケン人は社会的支配層からの攻撃を避けるために、船に住まいながら島々を移動し続けていた。マングローブ林や岩場など、海賊から身を隠すための適地が多く存在しているにもかかわらず、海賊からの攻撃を受けたり、奴隷狩りにあつたりするモーケン人が少なからずいたようである。

水のゾミアには、スコットが触れたように、奴隷狩り・海賊行為を働く海民がいたことが記録に残されている。その一方で、奴隷狩り・海賊行為の標的となる海民もまた存在していたことがわかる。このような避難民としての特性は、陸のゾミアを生きる山地民カレンと似ていよう。山地社会においてもしばしば奴隷狩りが行われていたが、カレン人は奴隷狩りの犠牲者であり、時には略奪者でもあったという (p. 88)。19 世紀のスルー諸島では、奴隷狩りにあつたサマ人が王国の支配下に組み込まれた後、次は王国のために奴隷狩りをする主体となるケースもあつた [Warren 1981]。ゾミアという縁辺地域において、移動性の高さは攻撃と防御の双方において力を発揮したと考えることができる。

なお、海民が島嶼や沿岸を避難先として選んだのは、支配層の脅威から逃れやすいという地理的理由からであるが、その他の点についても考える余地がある。それは、陸のゾミアに暮らす人々は、集住する定住者よりも健康で病気になりにくく、

動物性感染症にもかかりにくい。マラリア原虫を媒介とする蚊が海拔 900 メートル以上のところではほとんどいなかった (p.189) という記述にヒントが隠されているように思える。海民が暮らす浜辺や海上では、潮風が強く蚊が吹き飛ばされ、燦々と照りつける太陽に病原菌が追い払われてしまう [高谷 1993]。つまり、山地や海での暮らしは、外敵からの防御だけでなく、健康に過ごすことができるという理由から好まれていた可能性がある。そのうえで、規模の小さい集団に分かれて拡散し、移動性の高い生業手段をとっていたのが、ゾミアに暮らす山地民や海民であったと考えられる。

VI 民族的アイデンティティの流動性

ベトナム以外の東南アジア大陸部では、民族的アイデンティティと言語の関係は、流動的な傾向をもっている。他民族との緊密な接触の結果、人々は比較的短い時間で、民族的アイデンティティも言語も変えることができた。 [Walters 1999: 52]

スコットが第7章「民族創造」のなかで引用している、ウォルターズが注で記した文章である。ウォルターズは、民族的アイデンティティと言語に対して、異常に神経質なベトナム宮廷の話に对照させるかたちで記述している。スコットが対象とするゾミアにおいては、ベトナムをも含む広大な山間部で、民族的アイデンティティと言語は可変的であったという。このような、民族的アイデンティティと言語の流動性については、東南アジア海域世界においても当てはまるように思える。

20世紀初頭において、社会的階層構造の上部に位置するブギス人やマカッサル人の男性が、下部に属するサマ人の娘と結婚する事例 [Sopher 1965: 149] や、華人やマレー人の商人が、モーケン人の少女を妻にめとる事例 [ベルナツィーク 1968: 21] が報告されている。このように、若い海民の女性が通婚を通して、政治経済的に優位な集団に編入される機会がたびたびあった。その子孫の民族的アイデンティティと言語使用のあり方

は、民族間関係や政治状況のもとで変化するような、流動的なものであったとみることができよう。そうした動態は、現代の海民社会においても確認することが可能である。

サマ人研究者の長津 [2009b: 202-204] は、海民の言語使用のあり方に着目した論考のなかで、マカッサル人の女性と結婚をし、日常的にマカッサル語を話すようになったサマ人の男性が、自らを「バヨ (サマの他称)・マカッサル」人と名乗っている事例を紹介している。この男性は、両親がサマ人なのだが、マカッサル人が人口、文化、政治経済すべての面で優位集団である地域に暮らしており、地域的なリング・フランカがマカッサル語であるため、サマ語をほとんど忘れてしまっていた。この事例は、海民の子孫が、自らの民族的アイデンティティの帰属先を、ローカルな文脈に基づいて時と共に変化させてきたことを推考させるものである。

他方で、サマ人が人口の多数を占める地域においては、サマ語を母語としていなかった他民族 (マンダラ人、ブギス人、マドゥラ人、ジャワ人、華人を祖先に持つ人々) が、今ではサマ語を日常言語として用い、自らをサマ人とみなす事例も報告されている [同上書: 204-209; 長津 2013: 33-34]。なかには、両親がともにサマ人でも、サマ語話者でもないにもかかわらず、自らをサマ人として自己定位している場合もあるという。長津は、1930年と2000年に行われた人口センサスを比較し、現在でこそサマ人が人口の多数を占める地域において、1930年の段階ではマドゥラ人や南セレベス出身者 (マカッサル人とブギス人) が圧倒的多数であった点を指摘している。これらのデータをもとに、さまざまな出自を持つ在地住民と多数の移民が、もともとは少数派にすぎなかったサマ人の言語を日常言語化し、また自らをサマ人とみなすようになった、と長津は推論している [長津 2012: 262-269]。

しかし、ここで一つ疑問が残る。それは、歴史的にみて政治的な優位集団であったマカッサル人やブギス人が、どうして周縁的な社会的地位におかれてきたサマ人としての民族的アイデンティティを持つようになったのかという点である。サ

マ人が人口で多数派を占めるというだけでは、この疑問に答えたことにはならないだろう。「アイデンティティとは、有利になったり不利になったりする状況の変化に応じて移り変わっていくもの」というスコットによる指摘 (p.252) を思い起こす必要があるようだ。東南アジア海域世界において、上位集団とされる人々が下位集団の民族名に自己定位する可能性として、もっとも妥当と考えられるのは、長津による次の考察である。

「陸からみた周縁」は、周縁かつはざまであるがゆえに、王権や近代国家の秩序、そうした秩序に基づくさまざまな社会的規制や文化的規範がより薄い、あるいは操作しやすい空間であるといえる。……「陸からみた周縁」の、いま述べたような社会文化的文脈に生成した空間においては……階層化された民族間関係に基づく自己定位そのものが意識されなくなっていたのではないか。……他方で、「陸からみた周縁」であると同時に「海域フロンティア」でもある社会空間では、サマ語を話し、サマを名乗ることに、積極的な意味が見いだされていたのかもしれない。たとえば、そのことが、漁業や海洋交易などの海を基盤とする経済活動に従事し、そのための海道ネットワークを利用するうえで有利であったというような可能性である。[同上書：276-277]

つまり、水のゾミアのような、国家の中心からみたときの海域の周縁においては、海産物交易に基盤をおいた「ネットワーク社会」が発達していると考える。ネットワーク社会とは、一つの中心によって統合されるようなヒエラルキー（一元的階統制）の構造ではなく、下位も上位を支配しうるといってヘテラーキー（非階統的な多元変則支配）の構造を特色としている [立本 1999: 218]。サマ人やモーケン人などの海民が暮らす「水のゾミア」では、ナマコなどの中国向け海産物が多く採捕できる。それらの交易品を扱い、経済的な恩恵を得るためには、もともとはサマ人やモーケン人でなかったとしても、海民としての民族的アイ

デンティティを持った方が有利な状況もあるはずである。東南アジア海域世界では、古くから生業において商業志向が極めて強いものであるため [同上書：長津 2004]、経済的な利益を得るために多民族による接触と混淆——通婚、言語使用、自己同定意識の変容、アイデンティティの操作——がすすみ、状況依存的な民族的アイデンティティの流動性がみられるのではないだろうか。

VII 「現代のゾミア」論に向けて

本稿では、水のゾミアの東南アジア海域世界を取り上げて、そこに暮らす海民の「移動性の高さ」と「地理的周縁性」と「民族的アイデンティティの流動性」について、若干の考察を加えてきた。検討項目を2点に絞ってみたものの、まだ詳細に論じられたわけではない。

本稿では、海民の移動の契機を「支配層の脅威からの逃避」に限定して考察したが、実際には、利用できる資源の枯渇、新しい資源利用地の開拓、伝染病の流行、戦争、自然災害、季節風の周期的変化、仲間の死、国境を利用した密貿易（越境交易とも表現できる [床呂 1999]）、予知夢など、さまざまなきっかけが考えられる。なかでも、季節風の周期的変化にあわせた移動は、漁撈を安全に行うためにも水のゾミアでは重要な論点となる。

また、水のゾミアの広域において造礁サンゴのリーフが発達している点も、海民がそこで暮らし続ける背景を理解するために重要である。単に地理的な周縁に位置するからだけでなく、サンゴ礁海域は陸上の熱帯雨林よりも生物現存量が大きな生態系であるため [秋道 2000: 16]、多種類の魚介類を採捕できる場所として、意識的であれ無意識的であれ、海民に生活空間として選ばれてきた側面があるように思われる。

さらに、海民の民族的アイデンティティの流動性についても、言語使用のあり方に着目した考察に偏ってしまった。宗教や儀礼、生業や慣習、あるいは国籍といった別のさまざまな側面からも、検討されるべき事項であろう。たとえば近年、タイ領に暮らすモーケン人はタイ人との接触が増加し、上座仏教の影響を受けるようになっていく。

タイ政府によるアンダマン海域の囲い込みが進み、一部のモーケン人はタイ国籍を得るようになってきた。そのようなモーケン人のなかには、「私はモーケン人であるがタイ人でもある」という複雑な民族的アイデンティティを持つ者もあらわれるようになった〔鈴木 2014〕。スコット (p. 244) は、アイデンティティを山地民と平地民のどちらにも自己定位するカレン人を「民族的両生類」というメタファーであらわしたが、「水」と「陸」の両方で生きるという意味では、海民にこそ使用するのふさわしいかもしれない。

スコットは、『ゾミア』で展開される議論は、第2次世界大戦以後にはほぼまったく通用しないと断りを入れている。しかし、近年のサマ人やモーケン人の事例をみるにつけ、現代においても民族的アイデンティティの流動性がみられることから、ゾミアの特徴の一部は、「現代のゾミア」を考察するうえでも有効なのではないだろうか。実際に、2015年2月24日に京都大学で開催された第1回「ゾミア研究会」において、久保忠行が「現代のゾミア? —— カヤー (カレンニー) 世界の人の移動と民族の動態」というタイトルで発表している。このように、共時的世界を主な研究対象とする多くの地域研究者によって、「現代」という視座から「ゾミア」を論じる価値は十分にあると考える。

先に触れた「民族的両生類」に話を戻すならば、現代の視座に立った場合、もはや「水」と「陸」の二つでゾミアをとらえることはあまり意味がないのかもしれない。なぜなら現代においては、山地民と平地民/低地民、あるいは海民と平地民/低地民という単純な二者関係のみで論じることは困難になりつつあるからだ。ときには、山地民と海民というゾミア民同士の関係性をも視野に入れる必要があるし、より複雑な場合にはその関係性のなかに、平地民/低地民としての民族的アイデンティティが入り込む場合もある。たとえば、カレン人の子孫であるビルマ人が、モーケン人と関係性を深めるようになった事例が報告されている。⁷⁾

7) アメリカ人宣教師ジャドソン (Adoniram Judson 1788-1850) によって改宗したビルマ人がカレン人に対して宣教を行い、そのなか

また、以前にも増して海民社会に対して影響力を持つようになった国家、そして国際機関や NGO などの超国家的組織の存在も無視できない。今後は、多様なアクターに目を配りながら、現代の水のゾミアと陸のゾミア双方を射程に入れた、包括的な研究がすすめられることが期待される。

参考文献

- Ainsworth, Leopold. [1930]2000. *A Merchant Venture among the Sea Gypsies: Being Pioneer's Account of Life on an Island in the Mergui Archipelago*. Bangkok: White Lotus.
- 秋道智彌. 2000. 「海と人類」『海のパラダイム』(海のアジア 1) 尾本恵市; 濱下武志; 村井吉敬; 家島彦一 (編), 3-30 ページ所収. 東京: 岩波書店.
- ベルナツィーク, H. A. 1968. 『黄色い葉の精霊——インドシナ山岳民族誌』大林太良 (訳). 東京: 平凡社. (原著 Bernatzik, Hugo A. 1938. *Die Geister der gelben Blätter. Forschungsreisen in Hinterindien*. München: F. Bruckmann.)
- Chou, Cynthia. 2010. *The Orang Suku Laut of Riau, Indonesia: The Inalienable Gift of Territory*. New York: Routledge.
- Daniels, Christian. 2010. Review of *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* by James C. Scott. *Southeast Asian Studies* 48(2): 205-210.
- Ferguson, Jane M. 2011. Review of *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* by James C. Scott. *Review of Politics* 73(3): 520-521.
- 羽原又吉. 1963. 『漂海民』東京: 岩波書店.

で改宗したメンバーの一人にナウ・ラ (Naw Lah) という女性がいた。彼女のひ孫の子どもにあたるナウ・セイ・ベイ (Naw Say Bay 1934-) はカレン人の血を継ぐビルマ人である。彼女は1973年からメルギー諸島各地のモーケン村落をまわり、ときにモーケン人と共に暮らしながら、布教活動を行ってきた〔Koh 2007〕。ただし、モーケン人とカレン人の場合は、両者の生活圏がもともと部分的に重なっていたため、古くから関係を持っていた可能性が高い。仮に現代に目を向けるとしても、過去との連続性にも注意を払って検討する必要があるだろう。

- Hamilton, Walter. 1828. *East India Gazetteer*, Vol. II. London: Parbury, Allen and Co.
- 早瀬晋三. 2003. 『海域イスラム社会の歴史——ミンダナオ・エスノヒストリー』東京：岩波書店.
- Jonsson, Hjorleifur. 2010. Above and Beyond: Zomia and the Ethnographic Challenge of/for Regional History. *History and Anthropology* 21 (2): 191-212.
- Koh, Angeline. 2007. *How the Moken Sea Gypsies Got Their Book: Naw Say Bay's Story as Told to Angeline Koh*. Singapore: Media Singapore.
- Mason, Francis. 1860. *Burmah, Its People and Natural Productions: Or, Notes on the Nations, Fauna, Flora, and Minerals of Tenasserim, Pegu, and Burma, with Systematic Catalogues of the Known Mammals, Birds, Fish, Reptiles, Insects, Mollusks, Crustaceans, Annalids, Radiates, Plants, and Minerals, with Vernacular Names*. 2nd ed. Rangoon: Thos. Stowe Ranney.
- 長津一史. 1997. 「西セレベス海域におけるサマ人の南下移動——素描」『上智アジア学』15: 99-131.
- . 2004. 「越境移動の構図——西セレベス海におけるサマ人と国家」『海域アジア』(叢書現代東アジアと日本4) 関根政美; 山本信人(編), 91-128 ページ所収. 東京：慶応義塾大学出版会.
- . 2008. 「サマ・バジャウの人口分布に関する覚書——スラウェシ周辺域を中心に」『アジア遊学』113: 92-102.
- . 2009a. 「島嶼部東南アジアの海民——移動と海域生活圏の系譜」『東南アジア』(朝倉世界地理講座3——大地と人間の物語) 春山成子; 藤巻正己; 野間晴雄(編), 250-259 ページ所収. 東京：朝倉書店.
- . 2009b. 「境域の言語空間——マレーシアとインドネシアにおけるサマ人の言語使用のダイナミクス」『多言語社会インドネシア——変わりゆく国語, 地方語, 外国語の諸相』森山幹弘; 塩原朝子(編), 183-212 ページ所収. 東京：めこん.
- . 2012. 「異種混濁性のジェネオロジ——スラウェシ周辺海域におけるサマ人の生成過程とその文脈」『民族大国インドネシア——文化継承とアイデンティティ』鏡味治也(編), 249-284 ページ所収. 長野：木犀社.
- . 2013. 「東インドネシア, 海民の社会空間——ゲセル島で村井さんと考えたこと」『早稲田アジアレビュー』14: 31-34.
- Narumon Arunotai; Paladej Na Pombejra; and Jeerawan Buntowtoo. 2007. *Uuraklawoi Mokaen lae Mokaen: Phuchiaochan Thale Haeng Kolae Chaiphang Andaman*. Bangkok: Chulalongkorn University Social Research Institute. (タイ語)
- 村井吉敬. 1998. 『サシとアジアと海世界——環境を守る知恵とシステム』東京：コモンズ.
- 佐藤 裕. 2014. 「新刊紹介 ジェームズ・C・スコット著, 佐藤仁監訳『ゾミア——脱国家の世界史』」『国際開発研究』32(2): 145-147.
- Slater, Dan. 2010. Review of *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* by James C. Scott. *Comparative Political Studies* 43(11): 1527-1531.
- Sopher, David E. [1965] 1977. *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. Singapore: National Museum of Singapore.
- 鈴木佑記. 2012. 「漂海民再考——海民研究へ向けた覚書」『南方文化』39: 117-134.
- . 2014. 「災害とマイノリティ——2004年インド洋津波に被災したモーケンのアイデンティティ変容」『次世代アジア論集』7: 3-24.
- . 2016. 『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』東京：めこん.
- 立本成文. 1999. 『増補改訂 地域研究の問題と方法——社会文化生態力学の試み』京都：京都大学学術出版会.
- 高谷好一. 1993. 『新世界秩序を求めて——21世紀への生態観』東京：中央公論社.
- Thompson, Thomas J. 2011. Review of *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia* by James C. Scott. *The Independent Review* 16(1): 125-128.
- Thomson, J. T. 1851. Description of the Eastern Coast of Johore and Pahang, and/with Adjacent Islands. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* 5: 83-92, 135-154.
- 床呂郁哉. 1999. 『越境——スルー海域世界から』東京：岩波書店.
- Walters, Oliver W. 1999. *History, Culture, and Region in Southeast Asian Perspectives*. Rev. ed. Ithaca: Cornell University Press; Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Warren, James F. 1981. *The Sulu Zone 1768-1898: The Dynamics of External Trade, Slavery, and Ethnicity in the Transformation of a Southeast Asian Maritime State*. Singapore: Singapore University Press.